

ポスターセッション概要

(1) 「外国につながる子ども達の支援グループと行政機関との連携に関する調査」中間報告 嶽肩志江（横浜国立大学）・石井恵理子（東京女子大学）・ 桶谷仁美（イースタン・ミシガン大学）

2016年度BMCN学習会でのワーキンググループ3「行政機関との連携」によるディスカッション（注1）を元に立ち上がったプロジェクト調査の中間報告である。本調査の対象は、2016年度、2017年度の研究会参加者やBMCNに関心を持つ個人・団体、さらには日本全国で外国につながる子ども達の支援をしている個人・団体で、各地域の支援グループと行政の連携の実態や、活動を行っている人々の行政に対する意識を中心に調査した。結果、今回は15件という限られた回答から分析を行ったが、特に行政との連携がうまくいった事例から、行政との信頼関係を構築するためには「現状報告」「意義・重要性・必要性の見える化」「実績の構築」「相互の役割の明確化」を行うことが重要であることがわかった。それが、行政窓口の担当者が上司に話を上げやすい条件を整えることにもつながる。また自分達の団体のみならず行政にとっても実績となる文脈を考え、お互いにWin-winの関係が構築できるよう意識することも大事な視点である。行政がお金や人を動かすのに慎重な理由にも配慮し、粘り強く働きかけ、対話する必要がある。

今後調査を継続し、情報を共有するとともに、海外に暮らす子どもにも目を向けていくこと、また海外の組織・機関等との連携を検討していくことも今後の課題としたい。（嶽肩・石井・桶谷）

1. 国際基督教大学教育研究所（2017）「バイリンガル・マルチリンガル（BM）子どもネット第1回学習会」（所報）『教育研究』59, 220-226. (URL: <http://subsite.icu.ac.jp/research/iers/publication/es/>) (2017/9/1 閲覧)

(2) パンフレット『子育てのことば一児童館からみえたこと』 鈴木庸子（国際基督教大学教育研究所）・ 西方郁子（ピナット～外国人支援ともだちネット）

児童館*勤務30年の経験をもとに、保育士や保護者対象に多言語環境の子どもの言葉の育成に関するパネルシアターを作成し、「ピナット～外国人支援ともだちネット」のボランティア活動で活用している。本発表は、このパネルシアターを土台として発展させた絵本形式のパンフレット（20ページ）とその意義づけである。パンフレットの主張は、多言語環境の子どもの子育てにおいて子どもに一番近い保護者（一般には母親）が最も自然に話せる言語（母語）で育てることが大切だということである。パンフレットの内容が示す通り、児童館における学童保育の経験が母語の重要性を強く裏付けている。パネルシアターやパンフレット開発の背景には、この母語の重要性を保育士と保護者に伝えたいという思いがある。今後、紙媒体とオンラインによる発信・提供を引き続き行う予定である。（*児童館：放課後、子どもに健全な遊びを提供する目的で自治体により運営されている施設）（鈴木）

【参考文献・参考ウェブサイト】

桶谷仁美(2007)『家庭でバイリンガルを育てる—0歳からのバイリンガル教育—継承日本語教育の立場から』明石書店

中島和子（2015）『バイリンガル教育の方法』（完全改訂版）アルク選書

関西母語支援研究会ウェブサイト「多文化な子どもの学び」（2017/9/1 閲覧）

URL: <http://education-motherlanguage.weebly.com/index.html>

上智大学短期大学部サービスマーケティングセンター「日本で子育てをする外国人の方へ」（2017/9/1 閲覧）

URL: http://jrc.sophia.ac.jp/volunteer/service_learning/forparents

Ryerson 大学（カナダ）「My Language.ca」（2017/9/1 閲覧）

URL: http://www.ryerson.ca/mylanguage/hold_on/

(3) BMCN リミテッド状況相談室—日本人保護者対象質問票の開発

島田かおる（啓明学園）・平塚淑江（あーすぷらざ外国人教育相談）

BMCNリミテッド状況相談室で相談を受け、ニーズに適した指導・支援方法や検査・訓練機関についての情報提供を行うためには、相談者の正確な情報が不可欠である。そこで保護者の主訴や対象児の言語面、認知発達面の特性について総合的、多面的な観点から情報収集を行えるような質問票を開発した。開発では、次の4点に留意した。①移動と言語環境の変化をもとに、言語の使用状況、発達の問題、学習の状況の三方向から状況を把握できること、②相談員が相談者への必要な手立てを予測することができること、③保護者の心情に配慮した表現であること、④個人情報保護（質問票の管理）に十分留意したものであること、である。

(4) 外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント DLA とは？—入門編—

小林幸江（東京外国語大学）・菅長理恵（東京外国語大学）

DLA（Dialogic Language Assessment:外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント）は、紙筆テストでは測れない文化的・言語的に多様な背景を持つ年少者の言語能力を、対話を通して測る支援付きの評価法である。文科省の委託を受けて東京外国語大学で開発された。年少者の言語力を会話の流暢度、弁別的言語技能、教科学習言語能力の3面に分けて捉える Cummins の言語習得理論に基づき、最も早く伸びる会話力をてこに、伸びるのに時間を要する教科学習言語能力を測ろうとするもので、「OBC（バイリンガル会話力評価）」、「対話型読書力評価」を参考にしている。支援付き対話型アセスメントの形をとることで、①児童生徒の潜在能力を引き出す、②自力でできることと支援を得てできることを併せて評価する、③成功体験・自尊心・学習意欲の醸成を図る、といった特徴がある。DLA は評価参照枠（<全体><技能別>）と<はじめの一步><話す><読む><書く><聴く>の5つの評価ツールから成り、児童生徒の発達段階と習得段階に応じて使用するツールを選び実施する。評価参照枠<全体>により必要な支援の段階を、評価参照枠<技能別>により必要な支援の項目を洗い出すことができ、日本語支援の計画に役立つ。

【参考文献】

Cummins, J. (1996/2001) *Negotiating Identities: Education for Empowerment in a Diverse Society*. Los Angeles:

California Association for Bilingual Education.

中島和子（編著）(2010)『マルチリンガル教育への招待—言語資源としての日本人・外国人年少者』ひつじ書房

以上